

梅おにぎりになりになった、

お父さんの遺産



株式会社はぴっく 物語ライター
眞喜屋 実行 (まきやさねゆき)

『残ったお金は、兄弟三人で均等に分けなさい』

それが、若くして大財閥を築いたお父さんの遺書の中身でした。
三人の子どもたちに残された遺産は、300円です。

お母さんは、お父さんが亡くなった翌日に、知らない男の人と出て行きました。笑顔でした。家の扉は、黄色いテープでバツ印に貼られ、中には入れません。

子どもたちは、困りました。
残っているのは、300円と、3日分のお米だけです。

一番上のお兄さんは、立ちあがって言いました。

「三人が一緒にいてもダメだ。別々に行動して、生きる道を探そう」

第二人は不安な顔をしましたが、一番上のお兄さんは、100円玉一枚と自分の分のお米を持ってすぐに歩いて行ってしまいました。

すると、二番目のお兄さんも、立ち上がりました。

「ぼくも行くよ。少し心配だけど、おまえもがんばれよな」

一番下の弟は、ひとり残されてしまいました。
そこにいても仕方ありません。家の中には、もう入れないのです。弟も、残った100円玉とお米を持って街へ向かいました。

三人はどうなってしまうのでしょうか。

それから一週間。

朝、弟が商店街の一本うらの道を歩いていると、一番上のお兄さんを見かけました。古いビルの階段に腰をかけてうつむいています。どうも元気がなさそうです。一枚の写真を大切そうに抱えて、時おり見ては、ニタニタと笑っています。

弟は聞きました。

「お兄さん、どうしてたの？ 100円は？」

「あの後さあ、竹下通りを歩いていたら、見つけちゃったんだよ」

お兄さんは、手に持っていた写真を、弟に見せつけました。

「ずっと探してたんだよ、これ。中山美穂ちゃんのブロマイド。もうどこにも売ってないからさあ、ビックリしたよ。オレはなんて運がいいんだろう。お店のおじさんは最後の一枚だって言うしさ、もう買うしかないだろ。本当は120円だったんだけどさ、3日間ねばって値切り続けたらさ、ようやく100円にしてくれたんだ。なかなかやるだろ？」

一番上のお兄さんは、とても嬉しそうに語りました。

体は痩せていたけど、笑顔は幸せそうだったので、弟は安心しました。

弟は、お兄さんの好物の「カレイの煮つけ」をごちそうして、一緒に歩きだしました。

すると、二番目のお兄さんが歩いているのを見かけました。

少し元気がなさそうですが、歩いている分一番上のお兄さんよりは良さそうです。

弟は、声をかけました。

「お兄さん、どうしてたの？ 100円は？」

「ああ、100円かい？ 少しずつ使ってるよ。路地裏の駄菓子屋さんに行くと、10円のお菓子がたくさん売られているんだよ。一日にひとつずつ買って、おかずにして食べてるよ。あと30円残ってる」

二番目のお兄さんは、今日のおかずだという紫色の「うまい棒」を弟に見せました。

「これがうまいんだよ。めんたい味。味が濃いからさあ、ほんの2cmくらいかじるだけで、ご飯一膳は食べられるんだ。ぐしゃぐしゃにしたらふりかけにもなるし、チーズ味と混ぜると、めんたいチーズができるんだよ。うまい棒を考えた人は天才だよなあ、ホントに」

二番目のお兄さんは、とても嬉しそうに語りました。

体は痩せていたけど、笑顔は幸せそうだったので、弟は安心しました。

弟は、二番目のお兄さんの好物の「イナゴの佃煮」をごちそうして、一緒に歩きだしました。三人が一緒に歩くのはしばらくぶりのことでした。

お兄さん二人は、不思議そうにして弟に聞きました。

「お前は、どうしてたの？」

(後編につづきます)

弟は、お兄さん二人にごちそうできるほどのお金を持っていました。

どうしたのでしょうか。一週間前は、二人と同じように100円しか持っていなかったはずですが。二人のお兄さんは不思議で仕方ありません。

「ボク？ ボクも100円は使っちゃったよ」

ますます分かりません。

「昔、お父さんが言ってたよ。欲しいものは一週間待って。それでも欲しかったら買ってもいいって。だから、欲しいものは我慢したんだ。ダイソーでマゴの手を見つけて、欲しくなったんだけどね」

一番上のお兄さんは、顔を赤くしてブロマイドを背中に隠しました。

「あと、お父さんはこんなことも言ってたでしょ。自分の為にお金を使ったら無くなるだけだから、人の為に使いなさい。そうしたら増えるからって」

二番目のお兄さんも顔を赤くして、五cmほど残っていたうまい棒を、一気に口に入れました。

「あの100円玉でボクのご飯を買っちゃったら、一回で無くなっちゃうと思ったんだ。だからさ、その代わりに梅干を買って、おにぎりを作ったの。それを持って高層オフィスビルの入口に立っていたら、120円で買ってくれる人がいたんだよ。はじめの日は五個作ったから、100円が600円になったんだ」

二人のお兄さんは、目を丸くしました。

「次の日からは、『ワシが今朝にぎりました』って貼り紙をつけたら、もっと売れるようになったの。そういうことを毎日やってたら、結構お金がたまってきたんだ」

二人のお兄さんは、目尻のシワを深くして弟を見つめていました。

どうしたことでしょう。お兄さん二人が、使いきったり減らしてしまった100円を、弟だけは増やしていたのです。

動けないお兄さんたちをじっと見つめ、弟は茶色の封筒を差し出しました。

「お兄さん、これでまた一緒に暮らせる？」

その中には、小さなアパートが借りられる位のお金が入っていました。
お兄さん二人は顔を見合わせます。

「ぼく、さみしかった。一緒に暮らせる？」

弟が言うと、お兄さん二人はその場で泣き崩れ、弟を置いて行ったことを謝りました。
弟も涙を流して、きゅっとお兄さん達の肩を抱き寄せました。

くの字に腰の曲がった男性三人が、都会の真ん中で抱きしめ合う光景は、行き交うビジネスマンの注目の的となりました。『じいさん兄弟のおにぎり』は、街の名物になりました。

七〇歳過ぎの三兄弟は、それからも仲良く暮らしたそうです。

●自分の欲しいものを買えば、一時の幸せ。

ひとの欲しいものを作れば、もうすこし長く幸せ。

『梅おにぎりになった、お父さんの遺産』

2011年8月

<http://p.booklog.jp/book/33083>

- 著者 : 株式会社はぴっく
物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)
- プロフィール : <http://haps.chu.jp/gaiyou.html>

- 著書 : 『ひたむきな人のお店を助ける 魔法のノート』
(ぱる出版さん 2011年6月) <http://amzn.to/iyJnSe>



ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33083>